インドネシア近現代における政治ツールとしての民話

——スハルト政権期を中心に——

もも せ ゆう こ
百 瀬 侑 子

《要 約》

インドネシアの近現代を通じて、時の中央政権が民話を政治ツールとして利用するという現象がみられる。本稿では、この現象に着目し、どのような意図から民話を利用しようとしたのか、時々の政治的・社会的文脈を探りながら、通時的に検証する。特にスハルト政権期には民話採集の大規模プロジェクトが実施され、利用規模の拡大が進んだ。国民統合政策、開発政策、パンチャシラ普及政策を円滑に押し進めるうえで、民話が計画的・組織的・積極的に利用されたのである。

第Ⅰ節では、スハルト以前の政治ツールとしての民話の系譜を辿るために、3つの事例を示す。①オランダ植民地期の官製出版社(バライ・プスタカ)による民話本の刊行、②日本占領期における民話「桃太郎」の宣伝・宣撫工作利用、③独立後のスカルノ政権期における共和国政府による民話集編纂、である。第Ⅱ節では、スハルト政権期の「文化開発」を検討し、民話に関する諸政策と言説を読み解くことによって、政治ツールとしての民話利用の目的を明らかにする。最後に全体のまとめを行い、民話などフォークロアが利用される枠組みを考える。

はじめに

- I 政治ツールとしての民話の系譜
- II スハルト政権期における文化政策と政治ツールとしての民話
- まとめとして

はじめに

多民族・多文化・多島海から成り、古来インド・中国・アラビア・ヨーロッパなどの文明・文化を受容してきたインドネシアには、きわめて多様で豊かな民話 (cerita rakyat)^(注1)がある。かつてそれらは各民族集団の言語で口承され、

娯楽としてのみならず、生活の知恵・教訓・民族集団の出自・歴史・信仰などを次世代へと伝承する手段として、さらには農耕儀礼・葬送儀礼の際の神聖な語りとして、民族集団のアイデンティティを維持するための重要な役割を担っていた [Proyek IDKD 1982b, 1-2; 1984, 1-3]。またインドネシアには古来書記された王権の年代記・王統記など「書き言葉の世界」も存するが、「この<書き言葉の世界>の周辺には広く深い<話し言葉の世界>(語りの世界)がひろがっている」[土屋 1994, 61]のである。民話もそのひとつである。しかし、近代化による伝承社会の変化とともに民話本来の役割は減退し、

地域社会で口承されてきた民話は、現在ではその多くは公用語のインドネシア語による印刷出版、映像・音声記録などによって、国の伝統文化・文芸のひとつとして保存されている。また、子ども用の読み物として再話され、多数刊行されている。

この民話という伝統的なメディアを、時の中央政権が「政治ツール」^(注2)として利用する現象が、インドネシア近現代史上の随所でみられる。本稿の目的は、この現象に着目し、どのような政治的意図から民話をツールとして利用しようとしたのか、その「文脈」について検討することである。権力を保持する主体の交替によって文脈は変化しつつも、民話の政治的な利用は終わることがない。特にスハルト政権期にはその利用規模の拡大が著しい。スハルト政権は独立後の最長政権であり、国家統一・国民統合のために諸政策を推し進めた。また国民文化を構築するために、伝統文化や各地域の民族集団文化を巧みに利用した。民話もその対象となり、民話採集の大規模な国家プロジェクトが実施され、各民族集団の口承民話が国民文化としての「インドネシア民話全集」へと再編集された[百瀬 2006, 27]。国家開発計画の下に近代化が進行したこの時期に、一見開発や近代化とは無縁な民話が政治ツールとして大規模に利用されたのである。

これまでインドネシア民話は文学・言語学・文化人類学・民俗学などの分野において、研究素材として各研究目的に応じてテキストが利用されてきた。しかし、民話が政治ツールとして利用される現象に着目した研究は意外にも少ない^(注3)。本稿では、この現象を通時的に捉え、本来は各民族集団や地域社会に帰属する民話を

時の中央政権がなぜ政治ツールとして利用しようとしたのか、政権の言説や政策に注目しながら、そのねらいを明らかにしたい。民話というメディアに焦点を絞り、インドネシア近現代における文化政策史の一端を素描するためのひとつの試みでもある。

全体構成は次のとおりである。第I節では、政治ツールとしての民話の歴史を辿るために、オランダ植民地期、日本占領期、独立後のスカルノ政権期における特徴的な事例を示す。第II節では、スハルト政権期の民話に関する諸政策と言説を取り上げ、政治ツールとしての民話の機能を探る。最後に、全体のまとめを行う。

I 政治ツールとしての民話の系譜

まずスハルト政権以前の政治ツールとしての民話の系譜を辿る。オランダ植民地期における官製出版社バライ・プスタカ(Balai Pustaka)の役割と民話本の刊行、日本軍による民話「桃太郎」の宣伝利用、スカルノ政権期に刊行されたインドネシア共和国初の官製民話集、の3事例を取り上げ、それぞれの政治的・社会的背景と民話利用の意図を探る。

1. オランダ植民地期の官製出版社バライ・プスタカの役割と民話本の刊行

インドネシア各地で口頭伝承されてきた民話が語り手から直接採集され、刊行されるようになるのは、19世紀以降である[Rosidi 1988, 2]。採集者はオランダを中心とするヨーロッパの研究者、宣教師、地方行政官などであり、資料はヨーロッパの専門誌に発表されたので[Rosidi 1988, 2]、インドネシア(当時はオランダ領東インド)の一般人の目に触れる機会は少なかった。

1860年代になると、現地でも官営印刷局（Landsdrukkerij）や民間出版社によって民話本が刊行される [Kemp 2004, 104-106]。1908年以降は「原住民」の読者を対象にした民話や古典文芸の本が「原住民学校及び住民の図書のための委員会」（Commissie voor Inlandsche School en Volklectuur）（以下「委員会」）によって選定・刊行され、本来は口頭伝承の民話が読み物としても広く定着していくのである。

19世紀後半から20世紀初めのインドネシアでは、交通や通信が発達するなか、近代的な教育制度の成立・普及 [戸田 1969]、後にインドネシア語となるムラユ語（マレー語）の書き言葉としての整備と普及^{（注4）}、出版業・ジャーナリズムの発展^{（注5）}、図書館の普及（後述）によって情報網が拡大する。そのため、読者としての大衆を対象とした情報戦略の重要度も増す。「ナショナリズムを生み出したのは出版語」 [アンダーソン 1995, 211] であると指摘されるように、出版物は未知の人々を結びつけ、インドネシアの民族意識の形成に強い影響を与えたのである。

植民地政府にとっても、出版戦略は重要な政策となる。まず、1908年に「倫理政策」の一環として、「良質かつ健全な本」を普及するために、前述の「委員会」が設置される。任務は図書館へ配布する本を選定する際に審査・助言することである [BP 1997, 13]。「良質かつ健全な本」の普及とは、観点をかえれば「反体制的な要素をもつ出版物の影響から住民を遠ざけるため」 [BP 1997, 5] の方策である。1917年に委員会は再編され、バライ・プスタカ（Balai Pustaka）と改称される。1921年には独自の印刷所をもち、編集・翻訳・印刷・販売・図書館部門

を備えた、250人の職員を擁する [Teeuw 1972, 112] 総合出版社となる。委員会時代に審査・出版された本は153点（うち子ども用72点）で、大多数はジャワ語とスダ語の古典文学や民話本であり、「危険性のない過去の作品」に重点が置かれた [Setiadi 1991, 35]。思想的に安全なものが出版対象となったのである。バライ・プスタカ時代になると、実用書・技術書・現代文学へと範囲は広がり、雑誌も刊行される。言語政策の一環として整備された「官製ムラユ語」を用いた本も刊行される。1942年までに2000点をこえる本が刊行されるが、政治分野は意図的に避けられ [Setiadi 1991, 39]、すべての掲載原稿はオランダ人を長とする編集部によって審査、検閲された [山本信人 1995, 164-165]。

読者獲得のため、バライ・プスタカは、書店・郵便局網を利用して、全国的な販売網を構築する。学校図書館へも独占的に本を配布する。倫理政策の一環として、1908年に「原住民」の学校に「図書室」（Taman Poestaka）が608室設置され、やがて一般にも開放された。1917年以降、図書の配布は委員会からバライ・プスタカへと引き継がれ、30年には図書室は2686に達する [Kamil 2004, 93]。各地を巡回する移動式図書館も設けられた。ジャワだけでも図書利用登録者は27万5000人にのぼる。借り手はひとりでも、又貸ししたり、非識字者へ読み聞かせするので、利用者の実数はこの数倍になるという。貸し出し冊数は1930年末には年間300万冊にのぼる [Teeuw 1972, 114]。ジャワ語の本ではワヤン物語が上位を占め、ムラユ語の本では民話、パントウン（叙事詩）、ヒカヤット（古典文学）など古典文芸に人気が集まり [Teeuw 1972, 114-117]、「危険性のない」、安全な読み物の普及

は政府の意図どおりに進行する。

一方1930年代に入ると、官製出版物に飽き足りない読者を狙った民間出版物が活況を呈しはじめ、ムラユ語口語体による民族主義的趣向の大衆小説^(注6)や「文化論争」^(注7)の舞台となる雑誌『プジャンガ・バル』(*Poedjanga Baroe*)誌が刊行される。植民地時代末期、出版市場をめぐる、官と民の激しい綱引きが行われたのである。

民話は子ども向け読み物の素材にもなり、ジャワ語やスダ語など地域の言語で出版された。そして1921年にはムラユ語による初の子ども向け民話本『賢い猫』(*Tjeritera Seekor Koetjing Yang Tjerdik*)が刊行される。ペローの再話によるフランス民話『猫の親方あるいは長靴をはいた猫』のオランダ語版からの翻案である[Prisma 1987 16(5), 93]。「フランスの文明化の過程のなかでペローの昔話は子どもたちに望ましい行動のパターンとモデルを与えた」[ザイプス 1990, 24]と指摘されるように、子どもの社会化を促すための教訓的な本である。そのうえバライ・プスタカには、官製ムラユ語を普及しようという言語政策上の狙いもあった。子どもたちもまた政策的な出版物の重要な読者として、戦略の対象となったのである。

オランダ植民地政府は、民話本や古典文学を「安全な読み物」と位置づけて、「反体制的な要素をもつ出版物の影響から住民を遠ざけるため」に巧みに利用した。だがそれは、次に紹介する日本軍のように露骨に民話を政治宣伝の直接的なツールとして利用する方策とは異なる種類の戦略であった。

2. 日本占領期の「桃太郎」

1941年12月8日の真珠湾攻撃とほぼ同時に、

日本軍はマレー半島に上陸し、東南アジア各地へ進攻した。奇襲作戦によるインドネシア各地への上陸は1942年1月以降である。3月5日には首都バタヴィアが占領され、3月9日にオランダ軍は全面降伏した。これ以降1945年8月までの約3年半、インドネシアは日本軍の占領下に置かれた。

占領地行政には住民の協力が不可欠であり、日本軍は住民に対する宣伝・宣撫工作のために、ドイツ軍のPK部隊を参考にして[櫻本 1993, 11], 新聞・雑誌・映画・ラジオ・演劇・音楽・絵画などの様々なメディアを利用した。言語政策としては「オランダ語の使用禁止」「マライ語(インドネシア語)の公用語化」「日本語の普及」という3方針が打ち出された[Anwar 1990, 32-33]。ジャワにおける日本語普及の目的は「日本語を通じて日本の国民生活日本精神及日本文化を理解会得せしむると共に日本語を大東亜の共通語たらしめ、共栄圏諸民族の思想を統一し其の団結強化に資し大業に挺身貢献せしむること」である[爪哇軍政監部 1944, 251]。「大東亜共栄圏」の一環として、ジャワの日本化を狙った政策である。小学校から大学まで日本語は必修科目となり、職場や地域社会でも日本語教育が行われた。そのため教科書の編纂が急がれ、多数の日本語教科書が刊行された[百瀬 1998, 16-18]。日本語教科書は語学学習書であると同時に、日本軍のイデオロギー注入のためのツールでもある。民話もまた素材として利用され、その代表格が「桃太郎」である。以下では、ジャワで再話された「桃太郎」について考察する。

占領直後の1942年にアジャラヤ出版部から刊行された一般成人用の『初等日本語会話読本』(*Boekoe Peladjaran Bahasa Nippon*)の19課に「桃

太郎」がある。この本はインドネシア語の対訳が付き、19課、254ページから成る、文庫本サイズの初級用日本語学習書である。内容をみると、簡単な挨拶用語、仮名文字練習、平易な文法学習、短文読解練習などが盛り込まれ、最終の19課に、いわば総集編として「桃太郎」が掲載されているのである。まず文中の桃太郎による2つの発言に注目したい。

「おぢいさん、おばあさん、近頃 南の島に 鬼がゐて 大へん 人民を 苦しめて 居るそうです。それで その鬼が島へ 鬼退治に 行きますから きびだんごを こしらへて 下さい」[アジャラヤ 1942, 184]。

「おれは 日本の 桃太郎だ。おまへが 弱い者を いぢめると 聞いて 鬼征伐に 来た」[アジャラヤ 1942, 190]。

この2つのテキストには、日本の学校用教科書の「桃太郎」(注8)にはない特徴がある。鬼ヶ島が「南の島」に特定されていること。鬼が「人民を苦しめて居る」こと。わざわざ「日本の」桃太郎だと名乗っていること。鬼退治の理由が「弱い者をいぢめる」からであること、などである。当時、日本軍はアジア侵略やインドネシア占領を正当化するために様々な宣伝用キャッチフレーズを作った。「大東亜共栄圏」, 「アジアの光日本」, 「アジアの指導者日本」, 「アジアの守護者日本」などである[ジャワ新聞社 1944, 165]。占領直後に作成された「19課 桃太郎」もまた宣伝用テキストのひとつとして捉えることができ、「南の島」はインドネシア、人々をいぢめる鬼はオランダ植民地政府、桃太郎は日本軍に擬せられているのである。テキストは異なるが、「桃太郎」はジャワ軍政監部が1944年に刊行した小学校用日本語教科書『ニッポンゴ』にも

掲載され、小学生にも教えられた[百瀬 1998, 20]。

日本軍がインドネシアで利用したのは日本の民話だけではない。ジャワでは「ジョコ・ケンディル」(Joko Kendil), 「バワンブティとバワンメラ」(Bawang Putih dan Bawang Merah)などの民話が紙芝居化され、日本軍の宣伝用紙芝居とともに上演された[百瀬 2002, 105]。また影絵芝居や人形芝居、大衆演劇などを通じて、日本軍は「軍政のメッセージ」を宣布した[ANRI 1988, 6]。「日本軍は民衆の意見が流れる溝としてのフォークロアの機能を承知しており、大衆演劇の上演に秘密警察を派遣して監視」したという[Danandjaja 1986, 19]。日本軍はインドネシアの民衆によるフォークロアの政治的な利用を恐れたからこそ、厳しく取り締まったのであろう。

3. スカルノ政権期の官製「民話集」

1945年8月17日インドネシアは独立を宣言し、翌日「45年憲法」のもとにスカルノ大統領が誕生する。その後、独立戦争、連邦共和国期を経て、1950年8月に単一のインドネシア共和国が成立する。以降、スカルノ政権期は、大統領の権限を制限する「50年暫定憲法」にもとづく「議会制民主主義期」(1950~59年)から、「45年憲法」体制にもどり、大統領の権限を強化する「指導される民主主義期」(59~65年)へと推移し、「9月30日事件」を契機に実権はスハルトへと渡る。スカルノ時代は「革命」の名のもとに、独立戦争、「地方反乱」を乗り越えて、多民族集団から構成される多島国家インドネシアを存続させ、「新しい政治の共同体つまり<インドネシア>という国民国家を創出していくことが目指され」[土屋 1993, 85] た、いわば国の大

枠がつくられた時期である。

「45年憲法」32条には「政府はインドネシアの国民文化を発展させる」と規定され、新興国民国家であるインドネシア共和国政府にとって、国民文化を発展させるための文化政策は重要な政策のひとつに位置づけられた。しかし、スカルノ時代には、文化政策を主管する教育文化省内の頻繁な組織変更 [P&K 1992, 3], 政治的な不安定状況などから、中央政府が計画的な文化政策に取り組むことに苦慮したことが窺える。

「民衆とのかかわりで具体的に文化政策を追求していたのは政党」[加藤 2004, 380] であるという指摘もあるように、特に議会制民主主義期においては、各政党の文化組織である「人民文化協会」(共産党), 「国民文化協会」(国民党), 「イスラム文化同盟」(ナフダトゥール・ウラマ) などが活発な文化芸術活動を行った [鏡味 1997, 75]。

とはいえ、政府によるいくつかの注目すべき文化政策が認められる。まず1947年に「共和国綴り」を発表し、国語としてのインドネシア語の標準化に取り組みは始める [埜山 1974, 23]。続いて1950年以降、ジャワ島の主要都市に国立の美術・音楽・舞踊などの芸術専門学校が設立され [P&K 1993, 287], 芸術教育の振興が図られる。さらに1952年には、教育文化省の地方支部が主要9都市に設置され [MOEC 1973, 15], 文化行政のための組織整備が開始された。また1959年には「総合開発8カ年計画」にもとづいた長期的な文化政策が企図された [加藤 2004, 381]。

文化政策のうち、民話に関する政策で注目すべき出来事は、1963年に教育文化省によって『民話 I』(*Tjerita Rakjat I*), 『民話 II』(*Tjerita*

Rakjat II), 『民話 III』(*Tjerita Rakjat III*) が刊行されたことである。インドネシア共和国政府が編纂した初のインドネシア語によるインドネシアの民話集である。その「まえがき」には次のような文言がみられる。「この民話集の編纂において基本としたことは、まず『多様性のなかの統一』としてのインドネシア全土の多様な民話を集めるように努めたことである。また可能なかぎり各地の民話モチーフや話型が同一あるいは類似しているものを近接させて配置した。それによって、民話を味わい、理解することができるばかりでなく、『多様性のなかの統一』としてのインドネシアの島々に分布している民話のなかに、共通点を認めることができるのである」[UAITR 1963, 3]。目を引くのは、文中のインドネシアという国名に、必ず「多様性のなかの統一」(*Bhinneka Tunggal Ika*)^(注9) という国家統一のためのスローガンが修飾句として置かれていることである。また「多様性のなかの統一」を紙面に具現する工夫として、同一モチーフの民話をできるかぎり多地域から集めて編集するという方法がとられている。たとえば、第1巻の1話から7話は「稲の起源説話」が選ばれ、伝承地はバニユマス、ケイ、バリ、マドゥラ、西ジャワ、カリマンタン、スラウェシと幅広い地域(複数の民族集団)の民話を選ばれている。国家スローガン「多様性のなかの統一」を強く意識した編集努力が窺えよう。「まえがき」の最後には「国家開発暫定計画^(注10)において、精神・文化開発分野で貢献を果たすために、継続的に今後も民話集を刊行する」という主旨の抱負が述べられ、この民話集が国家開発の一環として企図された、政治的な意図を含んだ民話集であることがわかる。その後、この

民話編纂事業はスハルト政権へと引き継がれ、第4巻は1972年、第5巻は75年に刊行されて、完結する。いわば政治体制をこえた文化事業である。しかし、この民話集とは別に、スハルト政権期にはスカルノ政権期を凌駕する大規模な民話採集プロジェクトが1976年以降実施され、民話の政治的な利用は拡大していくのである。

II スハルト政権期における 文化政策と政治ツールとしての民話

1. スハルト政権と文化政策の基本方針

スハルトが政治権限を掌握したのは1966年（大統領就任は68年）であり、98年までの30余年にわたり権力の座にあった。彼はスカルノ路線からの転換を図るために、その体制を「新秩序」と名づけ、「開発」と「安定」を政治課題とした〔鈴木 1999, 407〕。すなわち、国家開発政策による経済発展と近代化が目指され、開発という課題を達成するために、政治的・社会的な安定を維持することが優先された。治安・秩序の維持を図るために、政治活動や言論の自由は制限され、国民統合政策は徹底された〔土屋 1993, 90-97〕。「かつてない権力集中体制」〔佐藤 2002, 66〕が構築されたのである。

スハルト政権は国政上、法的な枠組みとして45年憲法を、理念としてパンチャシラを基盤とする〔LAN 1992, 4〕。パンチャシラはスカルノによって提唱され、45年憲法の前文に記述されている建国5原則^{〔注11〕}であるが、スハルト政権期には国民統合のイデオロギーとして意図的に高揚された。1978年にパンチャシラの公的解釈として「パンチャシラ理解と実践のための指針」^{〔注12〕}が国民協議会（MPR）で決議され、79

年からは公務員および中学から大学の新生入生に対してこの指針を徹底させるべく「指針研修講座」が課せられ、80年からは公教育において道徳教育として必修科目となる。1983年には「パンチャシラ唯一原則化」（Asas Tunggal Pancasila）が「国策大綱」に盛り込まれ、政治・政党活動もこの原則に従わなければならないことになる。1985年にはこの原則の下に、「総選挙法」など政治5法が公布される〔高橋 1995, 65-81〕。こうして、抽象的概念のパンチャシラは具体的な法令や制度を成立させ、国民の社会活動や政治活動を縛る規範となる。当然ながら、文化政策にも大きな影響を及ぼすことになるのである。

スハルト政権の文化政策は開発政策という大枠に組み込まれているので、文化政策を具体的に知るには「開発5カ年計画」（Repelita）のなかの「文化開発」に着目する必要がある。第1次開発5カ年計画（1969年度開始）では、食糧生産やインフラ整備に重点が置かれたので、文化開発が実質的に始動するのは、第2次開発5カ年計画（74年度開始）からである。第2次開発計画書の「国民文化」という章に、文化開発の基本方針が示されている。その骨子は次のとおりである（先頭の数字は筆者が付記した）。

- (1) 「歴史を通じて発展してきたインドネシア文化は、国家開発の基礎的な資産のひとつである。第2次開発計画期においては、国民のアイデンティティ、国民性、国民統合を強化するために、国民文化の振興と保護の増進に努める」〔Repelita II Vol.Ⅲ, 205〕
- (2) 「文化的多様性の存在は、開発資産としてのインドネシア文化の豊かさを示すが、インドネシア文化は本質的にはひとつである」〔Repelita II Vol.Ⅲ, 205〕

- (3) 「国民文化の振興と保護という枠組みにおいて、地方文化の提示と開発は、国民文化に豊かさと彩りを与えるうえで、重要な要素を成す」[*Repelita II* Vol.Ⅲ, 205]
- (4) 「国民闘争の代償であり、誇りであり、我々に恩恵をもたらす、歴史的な伝統遺産は、若年世代へと引き継がれ、維持されるべきである」[*Repelita II* Vol.Ⅲ, 205]
- (5) 「国民文化の振興はパンチャシラの規範に合致しなければならない。また、封建的な社会文化規範の発現を予防し、外国文化の悪影響に対処するためにもパンチャシラの規範は必要である」[*Repelita II* Vol.Ⅲ, 205-206]
- スハルト政権の文化政策は以上の5項目に集約できるのだが、第3次以降の開発計画で敷衍される部分を以下の(6)～(10)に挙げる。
- (6) 「文化開発分野において、インドネシア民族の個性を強化し、自尊心ならびに国民としての自信を深め、同時に団結心を強固にするために、たゆまずインドネシア民族の文化価値 (*nilai budaya*) を育成・発展させる」[*Repelita III* Buku Ⅲ, 83]
- (7) 「インドネシア各地域に存する文化は、民族の個性と理性を持つ国民文化を伸張させるための基礎資本である」[*Repelita III* Buku Ⅲ, 17]
- (8) 「国民文化はたゆまず育成され、パンチャシラに基づく民族性の価値を生かすことを目指す」[*Repelita IV* Buku Ⅲ, 17]
- (9) 「インドネシアの文化価値を顕在化するためには、パンチャシラと45年憲法にもとづくインドネシアの文化価値を目録化し、社会で共有する努力が必要である」[*Repelita IV* Buku Ⅲ, 26]

- (10) 「パンチャシラにもとづく国民文化は、生活全般において国家開発への認識と意味を与えるために方向づけられる。国家開発とは文化的な開発である」[*Repelita V* Buku Ⅲ, 1]
- すなわち、上掲の(6)では、文化政策の目的はインドネシア民族の「文化価値」^(注13)を育成・発展させることにあると述べられている。(7)では地域文化(地方文化)は国民文化を発展させるための基礎資本であることが示され、国家開発の資産である国民文化、国民文化の資本である地方文化、というように階層化される。また大原則のパンチャシラは一層強調され、常套語句となる。そして文化価値を具体的に示す方法として、文化価値の目録づくりが重視される。多民族の集合体であるインドネシア民族のもつ文化価値をいかに育成・発展させるか、これが文化政策の柱となる。国家開発は文化開発でもあることが強調され、文化はまさに政治のツールとなっていくのである。

では、文化開発においてどのようなプログラムが設定されたのか、具体的にみていこう。それは大きく4分野から成る。たとえば、第2次(1974年度開始)および第3次(79年度開始)開発計画では、「1. 伝統・歴史・文化遺産, 2. 芸術, 3. 言語・文学, 4. 出版(含む図書館事業)」の4分野である。第4次(1984年度開始)では、「出版」が3の「言語・文学」へ統合され、4に「文化目録化」(*Inventarisasi Kebudayaan*)が据えられる。第5次(1989年度開始)では、これが「文化価値の目録化と育成」(*Inventarisasi dan Pembinaan Nilai-nilai Budaya*)と名称変更され、第1番目に優先配置される。第6次(1994年度開始)では、「文化価値の目録化と育成」は「文化価値の育成と発展」(*Pembinaan dan*

Pengembangan Nilai-nilai Budaya) へと改称される。

この変化は何を意味するのだろうか。文化の目録化は既に第2次開発計画から開始され、第3次においては1～3の分野を横断・包括する共通プログラムとして実施された^(註14)。第4次において「文化目録化」は主要4分野のひとつとなる。第5次においては「文化価値の目録」という用語に置きかえられ、「価値」が強調される。この背景には「文化価値の目録化と育成事業はまだ色々と問題に遭遇している」という政府の危機感がある。政府が創出しようと試みたインドネシア民族の文化価値が国民に十分に認識されず、若年世代へ継承する努力もなされていないという危機感をもったのである。文中では、国民の責任感・信頼感・規律・団結心が十分でない指摘され、国民文化の発展が滞っていることが強調されている [Repelita V Buku III, 5-6]。第6次においては、タイトルから「目録化」という事務的な用語が削除され、スローガンをかざすように「文化価値の育成と発展」が文化開発の最優先項目に据えられる [Repelita VI Buku IV, 162]。その目的は「民族のアイデンティティと個性を強固にするため」であり、具体的な方策として民族の文化価値の目録化・研究・公開が挙げられている。その主対象となるのは地方文化である。地方文化の研究とは、民話にみられる礼儀・規律・慣習などの文化価値、民俗遊戯、社会の責任・信頼感、社会規範、思考様式などについて行うというものである [Repelita VI Buku IV, 163]。かくしてインドネシア民族の文化価値を育成・発展させるうえで、地方文化は一層重要な役割を担うことになったのである。

以上の文化開発政策の大枠を踏まえ、地方文化（各民族集団の文化でもあり、伝統文化でもある）のひとつである民話に関する政策に論を進めたい。

2. 政治ツールとしての民話の役割

以下では3つの事例をとりあげ、スハルト政権の開発政策において、民話にどのような政治的役割が与えられたのか検証する。第1の事例は、村落開発を円滑に進めるために、民話などフォークロアを伝達媒体として活用すべし、という民俗学者の提言である。第2は、国民統合およびパンチャシラ精神を強化するための民話採集記録プロジェクトである。第3は、民話のなかの文化価値を発掘し、次世代へ継承するとともに、子ども的人格育成と教育に利用するためのプロジェクトである。

(1) 開発政策の伝達媒体としての民話

独立後のインドネシアでフォークロアが学問として公式に成立するのは、インドネシア大学人類学科の正規科目として「フォークロア」が開講された1972年であり、その講義を担当したのがダナンジャヤ (James Danandjaja) である [Danandjaja 1991, 4]。彼は1975年に開催されたセミナーにおいて「開発のための伝統メディア」と題して注目すべき発言をしている [Danandjaja 1987, 229-239]。要旨は次のとおりである。民話・民謡・民衆演劇などフォークロアは伝統メディアとして村落社会で利用されてきた。その機能は観念・予見の伝達、慣習の維持、教育、集団の統制などである。開発理念の伝達にも、フォークロアは有効である。開発という新理念の普及には、古い既成概念の変更が必要である。では伝統メディアをどう利用すればいいのか。まずは当該村落に現存するすべ

でのフォークロアの目録づくりをする。調査地のトゥルニャン村（バリ）を事例に、影絵芝居・民衆劇・民話などが例示される。村民に新奇なものへの恐れを抱かせないためには、新理念は伝統メディアのなかに入れこむのがよい。なじみの演劇や民話のなかに対話形式あるいは独話形式で開発理念を入れる。さらに放送にも伝統メディアは利用できる。村人が好む芸能番組に開発理念を入れこむのである。子ども番組では民話のなかの開発理念を挿入する。開発理念をテーマとした創作民話も有効である。農村開発に伝統メディアは利用できるのである。以上がダナンジャヤの発言要旨である。

論をとおして、フォークロア研究が開発政策に貢献できることが力説されている。当時の学者や知識人の中には、国家発展の第一義として、開発政策を是認する立場から発言するという知的風土があったという [小泉 1986, 9]。この民俗学者の発言もまた然りである。この発言がされた1975年という時期に注目すると、第2次開発5カ年計画の初期にあたり、開発の第1目標は「生活水準と社会福祉の向上」、第2目標は「開発を次段階へ進めるための強固な基礎づくり」である。また開発推進のためには「住民の参加」が必要だと強調されている [Repelita II Buku I, 18-19]。開発が社会分野へと進展するにつれ、地域住民、特に多数を占める村落住民の理解と協力が必須であった。本論述が直接政府を動かしたかどうか確認できる資料はないが、事実はこの学者の発言に沿う方向へと進んだ。第1に、大規模民話採集プロジェクトの開始であり、第2に、創作民話劇ともいえるテレビ番組「シ・ウニル」(Si Unyil)の放送開始である。まず、民話の目録づくりの必要性を説

いたダナンジャヤに應えるかのように、1976年に全国規模の民話採集プロジェクトが始まる。彼は直接プロジェクトに関わっていないが、民話採集法について彼の理論が応用されたことはプロジェクト報告書の参考文献リストからわかる^(注15)。次に、「シ・ウニル」は国营テレビ放送局(TVRI)で1981~93年(計603話)に放送された人形劇形式の子ども向け番組である。Kitley (2000)による詳細な分析があるが、この人形劇では農村に住むウニル少年を主人公にして、家族・友達・村落住民が織り成す日常生活が描写される。そのなかで子どもたちが社会や国家とどう関わり、どう行動すればよいか、あるべき手本が描かれている。学校や村の諸行事において国民として期待される行動や役割が示され、国家政策がわかりやすく子どもたちに提示される。開発政策の方針が民話という糖衣に包まれ、人形劇という子どもたちの興味をひきつける媒体によって伝達される。まさにダナンジャヤが意図した創作民話を実現したのである。

しかし、ダナンジャヤの論述を待つまでもなく、スハルト政権はフォークロアを利用しようという確実な意志をかなり早くからもっていた。1969年4月に大統領と閣僚数人の出席の下に、全国から影絵芝居の上演者であるダランが集められ、ダラン会議が開催された。開発政策の重要な分野である農業開発、産児制限などについて、農民に説明し、理解と協力を得るために、影絵芝居をメディアとして利用しようと企図したのである [Hatley 1994, 230]。この事実からも、フォークロアの重要性をスハルト政権は十分に認識していたことが窺えるのである。

(2) 民話採集記録プロジェクト

開発5カ年計画における文化記録プロジェクトのうち、民話に関わるものは2つある。「地方文化目録化・記録化プロジェクト」(Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah = Proyek IDKD) (1979年度～90年代実施)と「地方文化調査研究記述プロジェクト」(Proyek Penelitian dan Pencatatan Kebudayaan Daerah = Proyek PPKD) (76～78年度実施)である。Proyek IDKDは「民話」, 「地方教育史」, 「地方共生システム」, 「民俗遊戯」, 「居住様式」[Proyek IDKD 1981/82, viii], Proyek PPKDは「民話」, 「地方史」, 「慣習」, 「音楽・舞踊」, 「文化地誌」[Proyek PPKD 1976/77, 1]の各5テーマが設定された。民話も地方文化のひとつとして重視され、史上初の全国規模の民話採集・記録が1976～80年度に行われたのである。この民話プロジェクトについては、すでに百瀬(2006)で詳しく分析したので、以下では要点を整理して、簡潔に述べる。

プロジェクト本部はジャカルタの教育文化省に設置され、全体の計画・調整・報告書監修を行い、各州に置かれた支部が民話の採集(フィールドワーク)、文字化、地方語からインドネシア語への翻訳、報告書の執筆など、実務を担った。調査は中央が作成した方針書に基づいて、標準的・統一的に実施された。1974年に「地方自治法」(74年法律第5号)、79年に「村落行政法」(79年法律第5号)が施行されて、中央政府一州一県一郡一村という行政組織が構築され、末端の村落部まで中央が統一的に管理できる体制が整ったことにより、官僚組織に支えられた大規模な全国プロジェクトが実施できるようになったのである。

プロジェクトは単年度予算方式で、年度ごと

に報告書が作成され、教育文化省から州別に『○○地方の民話』(たとえば『北スマトラ地方の民話』)として刊行された。

各報告書の分析結果から、民話プロジェクトの目的・実施状況・問題点などを以下にまとめる。報告書の記述に見られる目的は3つに集約できる[百瀬 2006, 20-22]。①国民文化の育成・強化、②パンチャシラの普及、③伝統文化の保護・記録である。この3点はスハルト政権の文化政策の根幹を支えるものであり(本節第1項)、これらを包括的に具現・提示できる格好な手段のひとつが口承民話の採集・記録なのである。口承民話の採集・記録は消失しつつある伝統文化を保護するとともに、共通語のインドネシア語で編纂・出版することにより、各民族集団の伝統文化である民話を国民文化として共有できる。政府のねらいはそれだけではない。パンチャシラの普及のために、民話が利用できると考えたのである。すなわち、1979～80年度には「パンチャシラ精神を内包する神話伝説の採集」というテーマが掲げられ、民話採集に政治イデオロギーの縛りがかけられた。「スハルト体制期のパンチャシラは村落共同体における価値観がその基盤に据えられている」[高橋 1995, 83]と指摘されているが、パンチャシラに土着性を付与するために、政府は民話のなかにまでパンチャシラ精神を探し求めたのである(注16)。極めて政策的・意図的な民話採集事業だといえよう。

現場での採集作業において、調査チームは様々な困難や問題に直面した。たとえば開発が進んだ地域においては、口頭伝承の消失や衰退、語り部を獲得することの困難という現実問題に遭遇した。一方、開発の遅れた地域には今も生

きている民話が多数残存するものの、僻地にあるために限られた予算・人員・日数では調査が難しく、時には語り部から語ることを拒否された。話が神聖であるがために、外部者に語ることが禁止されているからである。また各州には複数の民族集団が居住するが、予算が限られているので、すべての民族集団の民話を網羅して採集できず、「代表的な」あるいは「できるところから」という現実的な判断が下された。採集・録音した語りは文字化され、地方語からインドネシア語へと翻訳される。この作業を通じて、いくつかの問題が発生する。意図的・非意図的に取捨選択や操作が行われるという問題である。地方支部が作業をする際には、中央が作成した全国共通の方針書に従わなければならないので、採集した民話をすべて報告書に掲載できるわけではない。採集テーマにあわない話や規定のテキスト量に収まらない話は除外される。さらには、文字化段階や翻訳段階で、口頭での反復表現が簡略化され、読者を想定して難しい表現が平易化される。書記されることによって、だれが、いつ、どこで、なんのために、だれに語るかという、口承民話の生命である「場面」や「文脈」が欠落し「脱文脈化」する。最終的には、民族集団単位で伝承されてきた「民族集団文化」である口承民話は、州単位の「地方文化」として括られて、州ごとに1冊の報告書として印刷された。「民族集団文化を地方文化と読み換える文化政策」[庄司 1999, 165]という指摘は、民話にもそのままあてはまる。長く民族集団が保持してきた多様な民話は本来の文脈から切り離され、国民文化としての書記されたインドネシア民話集が創出されたのである。

(3) 文化価値の継承、子どもの人格形成のた

めの民話

本節第1項で述べたように、スハルト政権の文化政策の重要な柱のひとつに「歴史伝統の継承」がある。これは「文化価値」を次世代へ引き継ぐという、教育に関わる問題であると同時に、開発による近代化の弊害を阻止し、引き続き開発政策を進めるうえで有用な次世代を育成し、国民統合を一層強化するという、政治に関わる問題でもある。

以下では『子どもの人格形成における民話の役割』(*Peranan Cerita Rakyat dalam Pembentukan dan Pembinaan Anak*)という政府の調査研究報告書を取りあげ、すでに開発が進展した1990年代において、「歴史伝統の継承」のために民話に託された具体的な役割を探る。本報告書は「文化価値研究・育成プロジェクト」(*Proyek Penelitian Pengkajian dan Pembinaan Nilai-nilai Budaya*)の成果の一環として、Yunusら4名の調査研究者によってまとめられ、1993年に教育文化省の歴史伝統価値局から刊行された。内容をみると、家庭で民話を語ることをとおして、伝統的な価値観や行動規範をどのように子どもたちへ継承すればよいかという指針が示され、民話を子どもの社会化の手段として利用しようという確かな意図がみてとれる。内容は「1章 序、2章 調査地の概要、3章 用語解説、4章 民話テキストと分析、5章 子どもの人格形成における民話の役割、6章 まとめ」から成る。分析対象は西ジャワの民話11編^(注17)である。まず1章では、多民族国家であるインドネシアにおいては地方文化を理解することが必要であるという大前提が述べられ、地方文化である民話の価値が強調される。また、都市化によりモラルが低下し、若者の不良問題が発生している状況

下、幼児期からのよき人格形成が必要であると述べられる。2章では、民話の土壌を理解するために必要な西ジャワの地理・親族体系・歴史・文化が概説される。3章では、文化価値、その継承、善行・勤勉などモラルに関わる用語の解説がされ、最小社会単位としての家庭の存在意義が述べられる。核心部分の4章では、11編の民話テキストが示されるとともに、主人公の性格・態度・行動に触れながら、文化価値として継承すべきモラルに焦点を当てた民話の分析が行われる。5章では、文化価値を次世代へ継承するうえで、民話は内容そのものも、またメディアとしても重要であり、親が民話を語ることによって、子どもの人格形成をよりよい方向へ導くことができると説く。まとめとしての6章では、子どもの人格形成に有用な要素として、正直、自立心、謙虚、賢明、羞恥心、不屈、親・師への従順、助け合い、清廉、敬虔、神への帰依、勤勉、忍耐、沈着などが挙げられ、民話のなかにこれらの要素が内包されていることを主張する。

11編の民話のなかには、インドネシアでもっとも広く知られている民話「カンチル」が含まれている。カンチル（地域によっては「ブランドック」と呼称される）は熱帯の森に住む豆鹿（マメジカ科）のことで、主人公の名前でもある。この民話はインドネシア各地に広く分布し、類話が多い動物寓話である。カンチルは小型動物であるため、いつも虎（森の王者）や鰐（川の王者）に命を狙われる。自分の命を守るため、時にはか弱い他の動物を助けるために、知恵を働かせ、虎や鰐などを懲らしめるという話が一般的である。この動物寓話は「専制君主の暴政に対して庶民が風刺しようとして生まれたも

の」[森村 1980, 197]であり、「(内容は)王宮文学では常に抑圧されてきた力のない庶民に自信や自尊心をもたらすもの」[Dipodjojo 1966, 19]であるというのが定説である。子ども用の民話本のなかでは、カンチルは機知に富んだ悪戯者として描かれ [TPEAN 1990, 56]、子どもたちの人気者である。しかし、この民話は古くから口承されており、分布域が広く、話の変種が多いために、主人公カンチルの性格描写は一樣ではない。インドネシア全体を視野に入れると、実は極めて多義性をもつ民話なのである。たとえば、悪を懲らしめる正義漢として、ヨーロッパの「狐物語」の「ルナール」にそっくりな悪戯者として、自身の安全だけをはかる独善者として、時にははずるがしこい陰謀家として、描かれている [ヤン 1984, 70, 145, 535, 649, 674]。このように「カンチル」は多義的な民話であるからこそ、提示されたテキストから再話者や編集者の意図を探りやすいともいえるのである。

では、この政府報告書の「カンチル」ではどのようなテキストが提示されているのだろうか。まず話の冒頭で、主人公のカンチルは「小さくて弱いのが、正直で賢いために、いつも危険から逃れることができる」[Yunus et al. 1993, 29]と述べられ、「正直で賢い」という性格が長所として強調される。「悪戯者」としての要素は後退している。粗筋は、虎に捕われた羊を狼とカワウソは見捨てるが、カンチルは知恵を用いて救うという内容である。さらに、この報告書にはテキストだけでなく、次のような解説が付いているのである。「カワウソや狼の行為は恥ずかしい臆病者の行為である」「カンチルの行為を手本とすべきである」「(カンチルの行為に)

同じ生き物として助け合うという価値観をみてとることができる」[Yunus et al. 1993, 35] などであり、助け合いの重要性が説かれている。この「助け合い」こそ、スハルト政権時代のパンチャシラ公定解釈の第5項(注12参照)に強調されている要素なのである。政府版「カンチル」からその狙いが透けてみえてくるといえよう。

報告書の末尾には、政府の真意が吐露されている箇所がある。「社会の一員となるための教育の過程で、まず重要なのが家庭である」「よい家庭では家族相互の調和のとれた連携が形成される」「自立経験はまず家庭から始まり、親戚親族へ、地域社会へと拡大されていく」[Yunus et al. 1993, 88-89] と、個人の社会化の過程が段階的に示される。さらに続く。「国家の離陸時代を迎え、常に堅固な指針をもつことが国民に求められる時期に、今回の調査研究は今後の開発5カ年計画において大いに支持されるであろう。それ故インドネシア民族の文化価値に関する研究・精査・広報・伝達は、今後の課題および近代化の悪影響という問題への回答を得るために必要なのである」[Yunus et al. 1993, 89] と。本節第1項で既に触れたが、第5次開発計画において、政府はインドネシア民族の文化価値が国民に十分に認識されず、次世代へと継承する努力がなされていないという危惧(いらだち)を表明し、国民の責任感・信頼感・規律・団結心が十分でないという問題点を指摘した。加えて、「近代化の悪影響」としての青少年のモラル低下という問題に直面していた。政府はこの問題が今後の国家開発を阻害しかねないと危惧したからこそ、子どもの人格形成に関する指針を示そうとしたのである。この報告書はそ

の問題解決へ向けての政府回答として読み解くことができそうである。

よき人格形成のために民話を推奨したのは家庭に対してのみならず、学校に対しても同様である。本稿においては詳しく述べる用意はないが、民話は小学校の国語教科書に盛り込まれ、教えられた。また、民話本は学校図書館へ配布され、子どもたちの主要な課外読み物となった[Prisma 1987 16(5), 82-91]。民話は政府の様々なメッセージがこめられた媒体として、学校教育用にも利用されたのである。

以上の3つの事例からみてとることができるのは、文化を開発政策の枠組みに据えて、政治的に利用したスハルト政権の積極的な姿勢である。伝統文化としての民族集団文化は、地方文化として括られて再編され、国民文化を創出するための資本として利用された。民話の利用にも同様の原理が働いている。文化価値の発掘と提示はスハルト政権にとって国家建設の重要な政治課題として認識されたことが、民話政策からも窺い知ることができるのである。

まとめとして

以上のように、他国の支配を受けた植民地(あるいは占領地)時代と独立国家時代という大きな相違点はあるが、インドネシアの近現代において、中央政権による民話の利用は目的や形式を変えながらも、絶えることなく続き、スハルト政権期にはそれが最高潮に達した。各時代の特徴をまとめれば、次のように略述できるであろう。まず、中央政権によって民話や古典文芸が一般大衆向けに利用されるようになるのは、オランダ植民地時代の20世紀初頭である。この

時期、植民地政府によって民話や古典文芸は「安全な読み物」として、植民地支配を脅かす「危険な読み物」を排除するために、一種の防波堤の役割が期待された。結局その役割は完遂できなかったが、出版物としての民話はこの時代に普及した。また、民話は子ども向けの読み物に加工・再話されて、官製ムラユ語の普及や子どもの社会化を促す手段としても利用された。次の日本占領時代には、占領者の民話が被占領者への宣撫工作の材料として利用された。民話が政治宣伝の材料にされたのである。独立後初の民話集は、スカルノ政権下で国家開発計画の一环として編纂され、国民統合のスローガン「多様性のなかの統一」を具体的に示す手段として提示されたが、未完のままスハルト政権へと引き継がれ、完成した。スハルト政権期には、これまでの各政権の戦略と手法が総合的に採りいれられて、計画的・組織的・大規模に民話が利用された。外国文化の悪影響および近代化の悪弊を阻む防波堤の役割（成功したかどうかは別として）、バンチャシラという国家規範および開発政策推進のための政治宣伝の役割、子どもの社会化のための役割、多民族国家の統合とアイデンティティを強化するための役割、などが与えられた。いずれもかつての政権によって、試みられた手法である。なかでも注目すべき事業は、大規模な民話の採集・記録・出版プロジェクトである。東ティモール州（現在は東ティモール民主共和国）を除く26州で民話採集が行われ、報告書としての大部の民話集が刊行された。民話という民族集団文化が州単位の地方文化として一括され、政府主導の国民文化としてのインドネシア民話集が刊行された。政府の含意はともかく、結果として、インドネシア国民

が共有する国民文化としてのインドネシア語によるインドネシア民話は量的に著しく拡大したのである。

すでに、「(民俗は) 本来所属するグループから離れてさまざまな目的のために利用されやすい」[岩竹 1996, 46] とか、「何らかの操作のために伝統を利用したり、実際に創り出そうとしたりする」[ホブズボウム 1992, 460] という指摘がなされている。民話についても然りである。では、民俗や伝統はなぜ利用されやすいのか、利用しようとするのか、権力者を引きつける要因は何なのか。詳しく分析して示す用意はないが、示唆的な論述に触れたい。シュミットヘンズ (Smidchens) はフォークロリズム (folklorism, フォークロアの二次的利用) の歴史に言及し、19世紀の万国博覧会にみるように、「フォークロアは国家の歴史と文化の豊かさの象徴となった」そして「フォークロア収集と研究は国家の使命となった」[Smidchens 2005, 330] と指摘する。本来限られた共同体で共有されていたフォークロアが国家によって二次利用されるといふ枠組み (フォークロリズム) が生まれたのである。その最悪の事例がナチ政権によるフォークロアの政治利用である [Kamenetsky 1972, 221-235]。国家による二次利用において、欠かせないのはフォークロアの収集と国民への提示である。「民俗や口承文芸はただ地方に存在するだけでは国家的な価値を持たない」[岩竹 1996, 36] のである。インドネシアの事例からも明らかなように、収集と提示には政治的意図が強く働く。加えて、近代化によって失われていくフォークロアには、人々にノスタルジーと安心感を喚起させる機能がある。民話などのフォークロアが権力者によって糖衣として利用さ

れる所以でもある。しかし、民話などフォークロアは権力者のツールとして利用されるばかりではない。反権力のツール、権力への抵抗のツールとして利用されることもある。インドネシアにおいても、オランダ植民地時代や日本占領時代などにその例をみることができると[Rodgers 2003, 140-144; Danandjaja 1986, 20], 本稿では触れる余裕がなかった。

なお、スハルト政権崩壊後も、官民双方による民話の利用は終ることなく、むしろ活発化し^(注18)、民主化、地方の主張、メディアの多様化など政治社会環境が変化するなかで、民話の利用目的は多様化傾向を示している。これら現在進行形の動向については観察を積み重ね、今後の報告としたい。

(注1) インドネシア語の“cerita rakyat”は、「昔より民間に生き、口頭で伝承される話」[PPPB 1997, 187], 「散文形態の口頭伝承」[Danandjaja 1986, 21-22], 「地域社会に生きている語りで、神話・伝説・昔話・滑稽話を含む」[Proyek IDKD 1982a, 1]などと定義されている。日本語の民話や英語のfolktaleに比べて広義である。

(注2) 本稿で用いる「政治ツール」(political tool)とは、時の政府が文化政策や教育政策を含む政治上の諸政策を実行するための手段という意味で用いる。この用語はKamenetsky (1972) “Folklore as a Political Tool in Nazi Germany”の論考から示唆を得たものである。

(注3) 民話を植民地政府への抵抗のツールとして捉え、分析した研究にはRodgers (2003)がある。またスハルト政権期の政治的な民話採集プロジェクトに関する論考には百瀬 (2006)がある。

(注4) インドネシア人の母語はジャワ語、スンダ語、バタック語など各地域の言語である(独立後は「地方語」と呼ばれる)。ムラユ語はリンガ・フランカとしてインドネシア周辺海域で使用されていた。植民地政府において、オランダ語に加えて補助的な

行政用語として用いられ、1893年には公務員試験の科目にムラユ語が加えられた[土屋 1987, 83]。言語政策の一環として、20世紀初頭にオランダ人言語学者によって標準となる辞書や文法書が作成され、標準ムラユ語(官製ムラユ語)の表記・語彙・文法が整備され[埜山 1974, 23], 役所、学校、バライ・プスタカの出版物などを通じて、普及が図られた。

(注5) ムラユ語商業ジャーナリズムが成長期に入るのは1880年代で、20世紀初頭には定期刊行物はジャワ島だけで15種(うち日刊紙7)刊行されている[松尾 1997, 109]。1930年にはインドネシア全土の日刊紙は39、週刊誌は61種刊行されている[山本信人 1995, 171]。

(注6) いわゆる「ロマン・ピチザン」である。詳しくは山本信人(1995)を参照。

(注7) 「インドネシア文化」のあるべき姿に関して行われた議論のことである[山本春樹 1981, 193]。

(注8) 日本で初めて「桃太郎」が教科書に掲載されたのは『尋常小学読本一』(1887年)である。以降、戦前戦中を通じて検定あるいは国定教科書に掲載され続け、時代を写す鏡のように、テキストは変化していった。詳しくは、鳥越(2004)、滑川(1981)を参照。

(注9) この文言は1950年8月に制定された国章に明示されている。国章は神鳥ガルダをデザインしたもので、その胸に建国5原則のシンボルマークが印され、両足で掲げられたリボンに“Bhinneka Tunggal Ika”という古代ジャワ文学からとられた[富尾 1991, 267]一句が記されている。スカルノ政権によってこの一句は国家統一のスローガンとされた。

(注10) Pembangunan Nasional Sementara Berencanaのことで、1960年に61~69年を対象にした総合開発8カ年計画が立てられた[P&K, 1984, 322]が、経済危機(超インフレ)、政治不安(対マレーシア問題、「9月30日事件」など)から計画は実現できなかった。

(注11) 「唯一至高なる神性」「公正で文化的な人道主義」「インドネシアの統一」「協議と代議制において叡知によって導かれる民主主義」「インドネシア全国民に対する社会正義」の5原則である。翻訳は

高橋 (1995, 54-55) による。

(注12) 「指針」における5原則の解釈の要約は次のとおりである。「異なった宗教や信仰を奉じていても、お互いに尊重しあい、信徒間の融和をはかる」「他民族との相互尊重、相互協力」「個人や集団の利益より民族や国家の統合・統一ならびに利益と安全を優先する」「決議の前に協議を行い、全会一致による決議を得るよう努める」「社会正義を達成するための同等の権利と義務を持つ。この枠組みのなかで、家族主義的で相互扶助的な精神と態度を反映する高貴な行いが発展させられる」[高橋 1995, 54-55]。

(注13) nilai budaya (文化価値)の語訳は谷口(1984, 275)による。英語ではcultural valuesと訳されている[MOEC 1973, 10]。『インドネシア語大辞典』によれば, nilai budayaは「人間が生きていくうえで、極めて重要で、価値をもつ、基本問題に関する抽象的概念である」という語釈がなされている[PPPB 1997, 690]。インドネシアで著名な人類学者クンチャラニングラット (Koentjaraningrat) は「文化価値体系 (sistem nilai-budaya) とは、ひとつの社会の大多数の成員によって分かちもたれた、何が重要であり何が人生において価値があるべきかに関する抽象的概念の総体である」と説明している[クンチャラニングラット 1980, 460]。したがって、「文化価値」をわかりやすく説明すれば、「その社会が共有する価値観」という意味になるであろう。この「文化価値」(nilai budaya) という語は第3次開発計画以降の政府文書に頻出するようになる。第Ⅱ節第1項の(6)~(10)に示した文言からもわかるように、「文化価値」の育成は、インドネシア国民の個性と団結を強固にするために必要だとされ、民族の紐帯としての役割が強調されている。

(注14) たとえば、歴史考古学分野の研究資料作成、古文書の復刻、伝統芸能の記録と研究、地方文化の記録などである[*Replita III Buku III*, 33-34]。

(注15) 各州の報告書巻末の参考文献欄に掲載されているDanandjaja著の文献は次のとおりである。Danandjaja 1975. *Penuntun Cara Pengumpulan Folklor Bagi Pengarsipan* [文献記録のための民話採集法案内]。Jakarta: Fakultas Sastra, Universitas Indonesia. これは各州の共通使用文献となっている。

(注16) 「パンチャシラ精神」を内包した民話採集をテーマとしたプロジェクト報告書の一例として、『南スラウェシの民話』(南スラウェシ州の報告書)をみると、20編の民話が掲載されている[Proyek PPKD 1981, 20-130]。20編の内訳は、神話2編、昔話18編である。主人公は、神格2、王侯貴族3、動物6、一般民衆9である。このうち動物寓話6編の主人公はいずれも力のない小動物であり、人間世界での一般民衆が仮託されている。したがって、20編のうち15編は主人公が庶民であると考えてよい。テーマは人としてどう生きるべきかという人生訓が多い。推奨されている要素をあげると、賢さ(知恵)、報恩、忍耐、挑戦、神への祈り、他者への信頼、努力、正直、善行、助け合いなどである。しかし教訓的要素を含まない話が4編あり、道徳規範としてのパンチャシラ精神との関係要素は認められず、数合わせのために入れられた可能性がある。この段階では(1979年度)「まずパンチャシラありき」の大前提で採集が進められ、話の要素分析などについてパンチャシラ精神と合致させるための周到な準備がなかったことが窺える。だが、10年後の1988年になると、政府の出版局(パライ・プスタカ)より『パンチャシラ諸項目に関わる民話——小学生と園児のための読み物——』(*Cerita rakyat dalam kaitan butir-butir Pancasila: bacaan untuk sekolah dasar dan pokjar*)が出版され、次第に、パンチャシラ普及のための民話が子ども用に整備されていく。

(注17) 西ジャワに分布している民話「サバルジャヤ王」(Raja Sabarjaya)、「カンチル」(Sang Kancil)、「ランガ・ガディン」(Rangga Gading)、「カバヤン」(Si Kabayan)など11編で、主人公は王侯貴族、庶民、動物など多様であるが、教訓的な話が多く選ばれている。

(注18) たとえば、教育省言語センターによる民話懸賞募集事業[Pusat Bahasa 2005]、地方語学習用教科書における民話素材の利用[金子 2002, 158]、民話を語る活動[Kompas Feb. 24, 2006]、NGO読書普及活動における民話の活用[Jakarta Post June 26, 2006]、民話のアニメ化[『じゃかるた新聞』Sept. 15, 2005]、昔話フェスティバル開催[Kompas July 20, 2005]など、多様な分野で官民による民話の利用が

盛んにみうけられる。

文献リスト

<日本語文献>

アジャラヤ出版部編 1942.『初等日本語会話読本』
(*Boekoe Peladjaran Bahasa Nippon*) アジャラヤ出版部。
アンダーソン, ベネディクト 1995.『言葉と権力——インドネシアの政治文化探求——』(中島成久訳) 日本エディタースクール出版部。
岩竹美加子 1996.『民俗学の政治性——アメリカ民俗学100年目の省察から——』未来社。
鏡味治也 1997.「オキシデンタリズム——『民族文化』の語り方——」青木保ほか編『異文化の共存』岩波講座文化人類学第8巻 岩波書店 59-83。
加藤剛 2004.「現代インドネシアの文化政策と地域のアイデンティティ——リアウ州のムラユ化の政治過程——」加藤剛編『変容する東南アジア社会——民族・宗教・文化の動態——』めこん 371-459。
金子正徳 2000.「インドネシア新秩序体制における『地方』の創出——言語文化政策とランブン州の地方語教育——」『東南アジア研究』40(2)(9月) 141-165。
クンチャラニングラット編(加藤剛・土屋健治・白石隆訳) 1980.『インドネシアの諸民族と文化』めこん。
小泉允雄 1986.「インドネシアの開発論争における *Ke-budayaan* (文化) の位置づけ I」『アジア・アフリカ文化研究所研究年報』21号 7-14。
崎山理 1974.『南島語研究の諸問題』弘文堂。
櫻本富雄 1993.『文化人たちの大東亜戦争』青木書店。
佐藤百合 2002.「インドネシア——『開発の時代』から『改革の時代』へ——」池端雪浦ほか編『「開発」の時代と「模索」の時代』岩波講座東南アジア史 9 岩波書店 65-94。
ザイプス, ジャック 1990.『赤頭巾ちゃんが森を抜けて』(兼岡糸子・横川須美子・吉田純子訳) 阿吽社。
爪哇軍政監部総務部調査室編 1944.『極秘 爪哇に於ける文教の概況』爪哇軍政監部総務部調査室(復刻版 倉沢愛子解題 1991.『極秘 爪哇に於ける

文教の概況』龍溪書舎)。

ジャワ新聞社 1944.『ジャワ年鑑』ジャワ新聞社(復刻版 1973『ジャワ年鑑』ピブリオ)。
庄司博史 1999.「政策としての言語と文化」田村克己編『文化の生産』20世紀における諸民族諸文化の伝統と変容 4 ドメス出版 165-169。
白石隆 1986.「学校唱歌, 制服, ドラキュラ——インドネシアの国民統合——」原洋之介編『東南アジアからの知的冒険』リプロポート 69-108。
鈴木恒之 1999.「国民国家をめざして」池端雪浦編『東南アジア史II 島嶼部』新版世界各国史 6 山川出版社 406-473。
関本照夫 1999.「『伝統文化』概念が周縁化するもの——現代インドネシアの文化状況——」坪内良博編『<総合的地域研究>を求めて——東南アジア像を手がかりに——』京都大学学術出版会 135-161。
高橋宗生 1995.「国民統合とバンチャシラ」安中章夫・三平則夫編『現代インドネシアの政治と経済——スハルト政権の30年——』研究双書No.454 アジア経済研究所 53-94。
谷口五郎編訳 1984.『第IV次開発五ヵ年計画』谷口研究所。
土屋健治 1987.「文化統合と国民形成——インドネシア語市場圏の展開をめぐって——」『国際政治』84(2月) 80-94。
—— 1993.「東南アジアの脱植民地化」大江志乃夫ほか編『アジアの冷戦と脱植民地化』岩波講座近代日本と植民地 8 岩波書店 71-100。
—— 1994.『インドネシア思想の系譜』勁草書房。
戸田金一 1969.「インドネシア——オランダの言語政策とその反響——」多賀秋五郎編『近代アジア教育史研究下巻』岩崎学術出版社 281-334。
富尾武弘 1991.「多様性のなかの統一」石井米雄監修『インドネシアの事典』同朋社 267。
鳥越信 2004.『桃太郎の運命』ミネルヴァ書房。
滑川道夫 1981.『桃太郎の変容』東京書籍。
ホブズボウム, エリック 1992.「7 伝統の大量生産——ヨーロッパ, 1970-1914」(前川啓治訳) E. ホブズボウム/T. レンジャー編『創られた伝統』(前川啓治・梶原景昭ほか訳) 紀伊国屋書店 407-462。
松井和久 2002.「地方分権化と国民国家形成」佐藤百

- 合編『民主化時代のインドネシア——政治経済変動と制度改革——』研究双書No.525 日本貿易振興会アジア経済研究所 199-244.
- 松尾大 1997. 『バタビアの都市空間と文学——近代インドネシア文学の起源——』大阪外国語大学学術出版委員会.
- 百瀬侑子 1998. 「インドネシアにおける日本語教育史の一断面 ——日本軍政期日本語教科書の分析を通して——」『日本語教育』97号 13-24.
- 2002. 「宣撫工作メディアとしての紙芝居——日本占領下インドネシアを中心に——」『東南アジア——歴史と文化——』No.31 97-112.
- 2006. 「インドネシアにおける国民文化形成と民話——スハルト体制下民話採集プロジェクト報告書の分析をとおして——」『アジア太平洋レビュー』第3号 15-28.
- 森村蕃 1980. 『おどけもの小鹿物語』東洋文化社.
- 山下晋司 1999. 「インドネシアにおける国家と文化の生産」田村克己編『文化の生産』20世紀における諸民族文化の伝統と変容4 ドメス出版 31-46.
- 山本信人 1995. 「メダンのロマンピチザン」『法学研究』68 (11) (11月) 147-179.
- 山本春樹 1981. 「<インドネシア>の文化論的意味——1930年代の文化論争を通して——」天理南方文化研究会編『南方文化』8号 (11月) 193-207.
- ヤン・ドゥ・フリース編 (齋藤正雄訳, 関敬吾監修) 1984. 『インドネシアの民話——比較研究序説——』法政大学出版局.
- <外国語文献>
- ANRI (Arsip Nasional Republik Indonesia) [インドネシア国立公文書館] 1988. *Di Bawah Pendudukan Jepang : Kenangan Empat Puluh Dua Orang Yang Mengalaminya* (邦訳は, 倉沢愛子・北野正徳訳『ふたつの紅白旗 インドネシア人が語る日本占領時代』木犀社 1996年).
- Anwar, Khaidir 1990. *Indonesian : The Development and Use of a National Language*. Yogyakarta : Gadjah Mada University Press.
- BP (Balai Pustaka) 1997. *Gambaran Umum 80 Tahun Balai Pustaka* [バライ・プスタカ80年の概要]. Jakarta : Balai Pustaka.
- Danandjaja, James 1986. *Folklor Indonesia* [インドネシアのフォークロア]. Jakarta : Grafiti.
- 1987. “Manfaat Media Tradisional untuk Pembangunan [開発のための伝統メディア利用].” In *Kebudayaan dan Pembangunan, Sebuah Pendekatan Terhadap Antropologi Terapan di Indonesia* [文化と開発: インドネシアにおける応用人類学に対するひとつのアプローチ]. eds. Nat J. Colleta and Umar Kayam, 229-239. Jakarta : Yayasan Obor Indonesia.
- 1991. “Folklor Indonesia dan Jepang [インドネシアと日本のフォークロア].” In *Laporan Hasil Seminar Tentang Tradisi Budaya Indonesia-Jepang* [インドネシアと日本の伝統文化に関するセミナー成果報告]. ed. Direktorat Jenderal Kebudayaan, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan [教育文化省 文化総局編]. Makalah V [レジュメV] : 1-38.
- Dipodjojo, Asdi S. 1966. *Sang Kantjil : Tokoh Tjerita Binatang Indonesia* [サン・カンチル: インドネシアの動物物語の主人公]. Jakarta : Gunung Agung.
- Hatley, Barbara 1994. “Culture Expression” In *Indonesia's New Order : The Dynamics of Socio-Economic Transformation*. ed. Hal Hill, 216-266. NSW : Allen & Unwin Pty.
- Kamenetsky, Christa 1972. “Folklore as a Political Tool in Nazi Germany.” *Journal of American Folklore* 85 : 221-235.
- 1977. “Folktale and Ideology in the Third Reich.” *Journal of American Folklore* 90(358) : 168-178.
- Kamil, Harkrisyati 2004. “The Growth of Community-based Library Services to Support Education in Indonesia.” *Information Development* 20(20) : 93-96.
- Kemp, Herman ed. 2004. *Oral Traditions of South Asia and Oceania*. Jakarta : Yayasan Obor Indonesia, KITLV-Jakarta and Asosiasi Tradisi Lisan.
- Kitley, Philip 2000. *Television, Nation and Culture in Indonesia*. Ohio : Ohio University Center for International Studies.
- LAN (Lembaga Administrasi Negara Republik Indonesia)

- [インドネシア国家行政機構] 1992. *Sistem Administrasi Negara Republik Indonesia Jilid-1* [インドネシア共和国の行政制度 第1巻]. Jakarta: CV Haji Masagung.
- MOEC (Ministry of Education and Culture of Republic of Indonesia) 1973. *Culture Policy in Indonesia*. Paris: UNESCO.
- P&K (Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Indonesia) [インドネシア教育文化省] 1992. *Informasi Pendidikan Dalam dan Luar Negeri* [内外教育情報]. Jakarta: Balai Pustaka.
- 1993 [1984]. *Sejarah Nasional Indonesia* [インドネシア国史 第6巻]. Jakarta: Balai Pustaka.
- PPPB (Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa) [言語育成発展センター] 1997. *Kamus Besar Bahasa Indonesia* [インドネシア語大辞典]. Jakarta: Balai Pustaka.
- Prisma 1987. Laporan Khusus: Banjir Bacaan Untung Siapa? [特別報告: 読み物の氾濫は誰の利益?] (無記名記事) *Prisma* 16(5): 82-96.
- Proyek IDKD (Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah, Direktorat Sejarah dan Nilai Tradisional, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan) [教育文化省 歴史伝統価値局 地方文化目録化・記録化プロジェクト] 1981/82. *Sejarah Pendidikan Daerah Sulawesi Tengah*. [中スラウェシ地方の教育史]. Jakarta: Balai Pustaka.
- 1982a. *Cerita Rakyat Daerah Istimewa Yogyakarta* [ジョクジャカルタ特別地域の民話]. Jakarta: Balai Pustaka.
- 1982b. *Cerita Rakyat Daerah Jawa Tengah* [中部ジャワ地方の民話]. Jakarta: Balai Pustaka.
- 1984. *Cerita Rakyat Daerah Istimewa Aceh* [アテェ特別地域の民話]. Jakarta: Balai Pustaka.
- Proyek PPKD (Proyek Penelitian dan Pencatatan Kebudayaan Daerah, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan) [教育文化省 地方文化調査研究記述プロジェクト] 1976/77. *Cerita Rakyat Daerah Sulawesi Selatan* [南スラウェシ地方の民話]. Jakarta: Balai Pustaka.
- 1981. *Cerita Rakyat Daerah Sulawesi Selatan* [南スラウェシ地方の民話]. Jakarta: Balai Pustaka. (注記: 上記は表紙の記述に従ったが, 巻頭辞には Proyek IDKDによる79年度調査結果とある).
- TPEAN (Team Penyusun Ensiklopedi Anak Nasional) [国民子ども百科事典編纂チーム] 1990. *Ensiklopedi Anak Nasional 6k* [国民子ども百科事典 6k]. Jakarta: PT. Cipta Adi Pustaka.
- Pusat Bahasa [言語センター] 2005. *Sayembara Penulisan Cerita Rakyat* [民話記述コンテスト]. Jakarta: Pusat Bahasa.
- Rodgers, Susan 2003. "Folklore with a Vengeance: A Sumatran Literature of Resistance in the Colonial Indies and New Order Indonesia." *Journal of American Folklore* 116(460): 129-158.
- Rosidi, Ajip 1988. "Tradisi Lisan di Indonesia dan Masa Depan" [インドネシアの口頭伝承とその将来]. In *Laporan Hasil Seminar Tradisi Lisan dalam Perbandingan Kebudayaan Indonesia dan Jepang* [インドネシアと日本の伝統文化に関するセミナー成果報告]. ed. Direktorat Jenderal Kebudayaan, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan [教育文化省 文化総局編]. Lampiran 2-7: 1-5 [付録2-7, 1-5頁].
- Setiadi, Himar Farid 1991. "Kolonialisme dan Budaya: Balai Poestaka di Hindia Belanda [植民主義と文化: オランダ植民地時代のバライ・プスタカ]." *Prisma* 20(10)(Oct.): 23-46.
- Smidchens, Guntis 2005. "Folklorism Revisited." In *Folklore: Critical Concept in Literary and Culture Studies Vol.1*. ed. Alan Dundes, 319-338. New York: Routledge.
- Teeuw A. 1972. "The Impact of Balai Pustaka on Modern Indonesian Literature." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 35: 111-127.
- UAI (Urusan Adat-Istiadat dan Tjerita Rakyat, Djawatan Kebudayaan, Departemen P.D.K.) [教育文化省 文化局 慣習民話課] 1963. *Tjerita Rakjat I-III* [民話 I-III]. Jakarta: Balai Pustaka.
- Yunus, Ahmad, I Made Purna, Sri Mintosih and Elizabeth Tioria 1993. *Peranan Cerita Rakyat dalam Pembentukan dan Pembinaan Anak* [子どもの人格形成と育成における民話の役割]. Proyek Penelitian Pengkajian

dan Pembinaan Nilai-nilai Budaya, Direktorat Sejarah dan Nilai Tradisional, Direktorat Jenderal Kebudayaan, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan [教育文化省 文化総局 歴史伝統価値局 文化価値調査研究育成プロジェクト].

<法令・文書>

PPRI(Peraturan Presiden RI) Nomor 7 Tahun 2005 Tentang Rencana Pembangunan Jangka Menengah Nasional Tahun 2004-2009. [国家中期開発計画 (2004-2009年) に関するインドネシア共和国大統領令 2005年第7号].

Republic of Indonesia 1976. *Repelita II : The Second Five-year Development Plan(1974/75-1978/79)* Vol. I-III.

Republik Indonesia [インドネシア共和国] 1979. *Repe-*

lita III (Rencana Pembangunan Lima Tahun Ketiga, 1979/80-1983/84) [第3次開発5カ年計画] Buku I-IV [I-IV巻].

—— 1984. *Repelita IV (Rencana Pembangunan Lima Tahun Keempat, 1984/85-1988/89)* [第4次開発5カ年計画] Buku I-IV [I-IV巻].

—— 1989. *Repelita V (Rencana Pembangunan Lima Tahun Kelima, 1989/90-1993/94)* [第5次開発5カ年計画] Buku I-IV [I-IV巻].

—— 1994. *Repelita VI (Rencana Pembangunan Lima Tahun Keenam, 1994/95-1998/99)* [第6次開発5カ年計画] Buku I-IV [I-IV巻].

(大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員研究員, 2007年6月11日受付, 2008年2月13日レフェリーの審査を経て掲載決定)